



Humanity & Nature Newsletter

No.22
October 2009

地球研ニュース



ブルキナ・ファソ国北東部バンブリンガ村落の穀物庫。ここで栽培されるモロコシの収穫期は10月から11月。穀物の投入は屋根がまるごと外されて行なわれる。穀物を取り出すときは裏にある50cm四方の小窓を利用する (撮影: 石山 俊)

今号の内容

P2

特集1●地球研の第II期にむけて(1)
これからの地球研のありかたとは
——第I期をふりかえって
立本成文×湯本貴和×福嶋義宏

P4

特集2●プロジェクトリーダーに迫る!
ポスト石油時代の社会像
を提示したい
縄田浩志×渡邊三津子

P6

特集3●地球研フォーラム
生態のヘルスと人間のヘルス
が交感する軸を模索する
門司和彦×山村則男×
梅津千恵子×市川智生

P8

新連載 ■ 百聞一見——フィールドからの体験レポート
海面上昇で沈みゆく島々
——ツバルから日本への警鐘
中田聡史

歴史的・地域特性をさぐる
——インド北西部の農村から
上杉彰紀

P10

特集4●地球研コロキウム(第3回)
地球環境問題「存在」するのか?
——空間・差異・地域・環境と文化・スケール・境界
阿部健一

P12

■ 前略 地球研殿——関係者からの応援メッセージ
宿敵がいてこそ、がんばれる
長野宇規

P13

■ 所員紹介——私の考える地球環境問題と未来
青いだけが地球じゃない
山本圭香

P14

■ お知らせ
イベントの報告、出版物紹介、研究活動の動向
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、
平成21年度科学研究費補助金補助金一覧、
イベント情報

これからの地球研のありかたとは——第Ⅰ期をふりかえって

話し手●立本成文(地球研所長)×湯本貴和(地球研教授)×福嶋義宏(地球研名誉教授・鳥取環境大学教授)

編集●神松幸弘

2001年に創設された地球研は、2004年に独立行政法人化にともなって人間文化研究機構の構成機関となると同時に、新たに6か年の中期目標・中期計画を設定したことから、2009年度までを第Ⅰ期と位置づけている。この期間中に領域プログラム制を導入し、研究推進センターを研究推進戦略センターに改組するなどの改革にも着手した。同時に、第Ⅱ期の中期目標・中期計画の作成に向けて、プロジェクトごとに自己点検と内部評価を進めてきた。本誌では3回に分けて、この第Ⅰ期をふりかえり、第Ⅱ期に向けての新しい取り組みを紹介する。

第1回の今号では、地球研創設時からのメンバーでプログラム主幹を務められた福嶋義宏さんに、プロジェクトの運営、研究所のシステム、組織などに関してご意見をいただいた。

終了プロジェクトからなにを引き継ぐか

福嶋●私がリーダーを務めたいわゆる「黄河プロジェクト」の評価については本誌の第17号で総括していますので、ここでは要点だけにします。

「黄河プロジェクト」がとくに評価された点は、優れたデータセットをつくり、公開したことです。中国側の研究者との信頼関係によるところが大きいのですが、その基盤となったのは共同研究を長年続けてきた経緯・経験。これをとおして築くことができた成果です。

これを成功例だとすると、地球研はこの経験と結果をどう継承するかです。中国での研究は、環境をはじめ社会経済システムなど幅広い領域での取り組みが必要です。地球研にはなんとんでもこの研究を継続していただきたいと願っています。

国外研究の場合、対象国の国情は刻々と変化し、その動向は相手国研究者との関係を大きく左右します。とはいえ、それを乗り越えて地球研プロジェクトの

連続性は、新しい研究計画に引き継いでもらいたい。

湯本●海外学術研究は、アフリカであろうが東南アジアであろうが、研究対象の国の動向を正しく把握していないと対応できないですね。しかも、いまのご指摘は、プロジェクトの連続性という地球研の活動の根底に関わるものです。地球研が、対象国との信頼関係や共同研究の連続性を維持するシステムづくりも、大きな課題だと思いますね。

立本●システムや組織のあり方については、第Ⅰ期の後半に「領域プログラム」という考え方で強化しましたが、地球研としての主体的なアイデンティティはもうひとつ弱い。そこで、第Ⅱ期はもう一步進んで、「イニシアティブ」という枠組みを掲げました。これが地球研の特色を打ち出す組織・システムづくりの理念となって、研究の連続性につながるのではないかと期待しています。

とはいえ、研究の連続性といっても、プロジェクトからプロジェクトへと直接的に継承するのは、地球研のあり方としては違うように思いますね。

湯本●連続性についてもう一つ付け加えると、地球研独自のデータをきちんと維持することも大事でしょう。しかし、あるプロジェクトが集めたデータを別のプロジェクトが再利用したり、発展的に利用できるようにデータセットをきちんと継続したりすることも同じように重要だと思います。

地球研でボルネオ島の森林で集めている気象や生物のデータにしても、長期に続けているからこそ価値あるものになっています。領域プログラムにデータを維持するプラットフォームを置いて、のちのプロジェクトに継承することを考えてはどうでしょうか。

福嶋●私は、将来のリーダーを育てることも、地球研の重要な役割ではないかと考えています。ですから、失敗が許され



るプロジェクトがあってもよいのではと。規模を少し小さくして、思いきって若手に好きにやらせ、執行部が責任をもって支える。最終的な判定はもちろんのこと、進行中も厳しく指摘・論争する。湯本●たしかに現行のプロジェクトは、予算規模にしてもすべて横並びで、内容に応じた予算がそれぞれに整備されているわけではないですね。

立本●現行のプロジェクトの地道な研究戦略もさることながら、将来になにを引き継ぐのかの選定、新しいプロジェクトの立て方、リーダーシップ教育は、地球研としてやらねばならないことです。

文理融合で新しい地平を開く

立本●福嶋さんは、本誌の第17号で文理融合について、「自然の見方や考え方は価値観を伴うものだ」と書かれていますね。地球研は、そういった価値観についても正面から取り組む必要がある。

福嶋●私は、土壌浸食の研究から始めて、そこに人間活動を加え、それをモデルとして一般化させてきましたから、具体的なデータと常に行き来させることで水文学的に研究することはできます。ところ

※1 Jared Mason Diamond 専門は進化生物学、生理学、生態学。主な著書に『銃・病原菌・鉄』(草思社 2000)など。1998年コスモス国際賞を受賞。



たちもと・なりふみ(中央)
専門は人間科学でユーラシア
東南アジア地域研究。二〇〇七
年四月から地球研の所長。
ゆもと・たかかず(左)
専門は生態学。研究プロジェクト
「日本列島における人間・自
然相互関係の歴史的・文化的
検討」プロジェクトリーダー。
二〇〇三年から現職。
ふくしま・よしひろ
鳥取環境大学環境マネジメント
学科教授・地球研名誉教授。専
門は水環境学。研究プロジェクト
「近年の黄河の急激な水循環
変化とその意味するもの」
(二〇〇八年三月終了)のプロ
ジェクトリーダーを務めた。
二〇〇八年から現職。



(撮影：長野宇規)

が、人文科学、社会科学といわれると、突然、考えるべき範囲が膨大になって、「ほんとうにやれるのか」と、私なんかは思ってしまう。むしろ、人文科学、社会科学をバックグラウンドにする人たちにこそ、自然科学を包含する方向に打って出てほしい。おもしろい、刺激的な共同研究を進めてほしいと願っています。湯本●これまでのプロジェクトでリーダーシップをとっているのは、ほとんどの場合が理系の人という現状です。プログラムを強化するうえでは、自然科学の考え方やデータを使いこなせる人文社会系のリーダーがもっといてもよい。

世界的にみても、学際的な研究プロジェクトに文系のリーダーがいて、インパクトの大きな研究が進められている。地球研にも、そのような多角的な視点の研究は求められるでしょうね。ジャレド・ダイヤモンド*1は生態学者ですが、人文学的なスタンスで共同研究を展開している。立本●昆虫学者のエドワード・ウィルソン*2にしても、私は文系の見方をする人だと思っている。専門分野がなにかではなく、思考のあり方が問題です。人文学的な思考というのは、対象を大きく俯瞰して考

えることだと思います。

だから、個人的には文と理とを分ける必要はないと思う。自然の見方、考え方のなかに、そういう、いわば哲学をともなった人文学的なものの見方を自然科学に導入できればよいですね。

地球研の意志を示す イニシアティブ

福島●地球研の「イニシアティブ」について言えば、地域的あるいはテーマ的に「これは」というものを強力に押し進めることが肝要だと思います。

大気-陸面に人為的な因子がどう影響するかについては、シベリアであろうと長江であろうと、インドをもひっくるめて地球研の中心課題にするのも一案です。あるいは東南アジアの熱帯雨林における生物多様性はなにがなんでも継続して研究するというように、研究所としての強い意志のもとにプロジェクトを次々に打ち出すべきではないでしょうか。

実際に、強いリーダーシップを発揮して、「こうだ」というプログラムを五つほど立てていただけるということですね。立本●領域プログラムは五つ立てました。それは従来のプロジェクトをくくるもので、そのうちの二つが文明環境史と地球地域学で、それぞれサステナビリティ、ガバナンスにあたります。イニシアティブはその先を狙っていて、私としては、「循環」と「資源」、「多様性」の三つでいけると考えています。このなかに自然、人文、社会を含めればよいだろうと。

福島●イニシアティブは、そのように大きな括りであると思います。しかし、連携機関との望ましい関係構築やプロジェクトの公募をするには、もう少し具体的な方向性を指し示す必要があるのではないのでしょうか。

研究者の流動性の確保と 機関連携のあり方の追究

立本●連携機関については、当初の設計

にくらべると予算、人員規模などで流動性を維持することが難しくなっています。大学内の附置研究センター、研究科を超える大学規模の連携が必要です。ですから、ここに大学院教育を取り入れることも視野に入れています。

こういったシフトは他の機関にも見られるようになりましたが、こういうときこそ「地球研はこうだ」というものを打ち出す必要がありますね。

福島●もっといえば、プロジェクトが終われば元のポジションに戻れるなど、研究者のキャリアが保障される仕組みを用意しないといけない。地球研は文部科学省の所管でスタートしましたが、いまは独立行政法人化しているのですからね。

第Ⅱ期をもっと発展的に展開させるには、とにかく組織の自由度を高めないといけないと思います。第Ⅰ期の経験から、このことが欠かせないことがわかった。地球研にはぜひとも、組織の自由な制度を認めていただきたい。

立本●プロジェクト制・任期制という枠は第Ⅱ期でははずせないでしょう。日本の学界全体の流動性は思ったほど拡大していない。このことは創設時には想定していなかった。そういった点をふまえて、軌道を修正するのが第Ⅱ期です。任期制に関しては、イニシアティブにハブ的な制度というか組織をつくりました。それが研究推進戦略センターです。ハブの教授は任期を設定しない。このハブが、研究部を長期的視点に立って継続的に研究活動をサポートすることになります。

福島●地球研がどうなるか、外部の厳しい目もあります。第Ⅰ期に生れたプロジェクトの優れた発想をイニシアティブにうまくつないで、本格的に発展させていきたいですね。

2009年8月10日 地球研「はなれ」にて

ニュースレターでは、第Ⅱ期中期計画の進行と連動しつつ、地球研の新たな活動戦略を紹介します。引き続き次号にご期待ください。

※2 Edward Osborne Wilson 専門は社会生物学、生態学。コンシリエンスなどの理論を提唱。主な著書に『社会生物学』(新思泉社 1999)、『生命の多様性 上・下』(岩波現代文庫 2004)など。1993年国際生物学賞を受賞。

プロジェクトリーダーに迫る！

ポスト石油時代の社会像を提示したい

研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究——ポスト石油時代に向けて」〈資源領域プログラム〉

話し手●縄田浩志(地球研准教授)×聞き手●渡邊三津子(地球研プロジェクト研究員)

編集●渡邊三津子

人は化石燃料に依存しつつ便利な生活を手に入れた。その代償は、地球上のすべてをまきこむ環境問題としてあらわれた。地球環境問題を解く緒を「地に足をつけて暮らす人びとの知恵」に探る。

渡邊●プロジェクトの問題意識を教えてください。

縄田●そう遠くない将来、石油は枯渇し、化石燃料に依存する生活は終わりを迎えるでしょう。地球温暖化に比べると、まだまだ危機感が薄いのですが、「ポスト石油時代」に、人はどう暮らせばよいのか、それが問題意識です。

◎経験を語り継ぐことが、地球環境問題解決の道を拓く

渡邊●4月に「石油資源がなくなったとき、どうやって生活していきますか？」という市民セミナーを開催されましたね。

縄田●そのとき、1932年生まれの方から印象深いコメントをいただきましたね。「自分の人生を振り返ると、原始生活に近いような生活があって、幸福を感じるいまに至った。しかし、地球環境にはつねに複雑な問題がありそうだという危機感を感じてきた」と。70～80歳代の方は、石油に依存しない生活から現在に至るまでの状況をよくご存じです。

渡邊さんのフィールドではどうですか。渡邊●カザフスタンも化石燃料などの資源大国ですが、年配の方にうかがうと、「な

にもなかった」子ども時代からいわゆる近代的な都市生活に至るなかで、生活風景は刻々と大きく変化を遂げたようです。

縄田●そうですね。地球に暮らすだけれども、多かれ少なかれ化石燃料の恩恵をこうむっています。化石燃料に依存することで発生した問題は、一般の人たちも含めて、祖父母から孫の世代までが一緒に考える必要があると思います。

渡邊●石油に依存しない時代の生活をもっと知ろう、ということですか。

縄田●ただ過去を知るのではなくて、未来につなぐアイデアをしぼり出すことが必要です。世代を超えて経験や知識を未来の世代に伝えることが肝要です。地球環境問題の解決に向けて有効な方法があるとしたら、そのような点にこそ求められると思います。

◎「なりわい生態系」の全体像を描く

渡邊●「なりわい生態系」というのは、石油に依存しない生活体系のことですか。

縄田●「なりわい」を簡単に言うと、その土地に根ざした人間の生命や生活を維持するシステムです。昔ながらの生業は、自給自足的な側面が強く、再生可能な低エネルギーの食料や水を基盤にした生活体系です。私は、そういう人間のもともとの基本的な営みと、それをとりまく自然環境や動植物、家畜や農作物などすべて

を含めて「なりわい生態系」と呼んではどうかと考えています。

渡邊●プロジェクトでは、具体的にはなにを扱っているのですか。

縄田●中東の乾燥地域では、肉やミルクなどの食料の源であり、移動手段としても利用しているラクダや、人間の栄養源として欠かせないナツメヤシを中心とするオアシス農業を対象としています。

紅海沿岸部では、マングローブやジュゴン、サンゴ礁に焦点をあて、それらを取りまく社会の生態系を明らかにしたいと思っています。

渡邊●対象にされている「なりわい生態系」や地域はたくさんありますね。

縄田●対象国は4か国と多いのですが、複数の地域をあえて扱うのは、狭い地域で「なりわい」が完結することはありえないからです。沙漠など過酷な自然環境での暮らしは、脆弱な基盤のうえにあるからこそ、広い地域におよぶ人やモノの複雑なつながりのうえに成り立っている社会システムです。

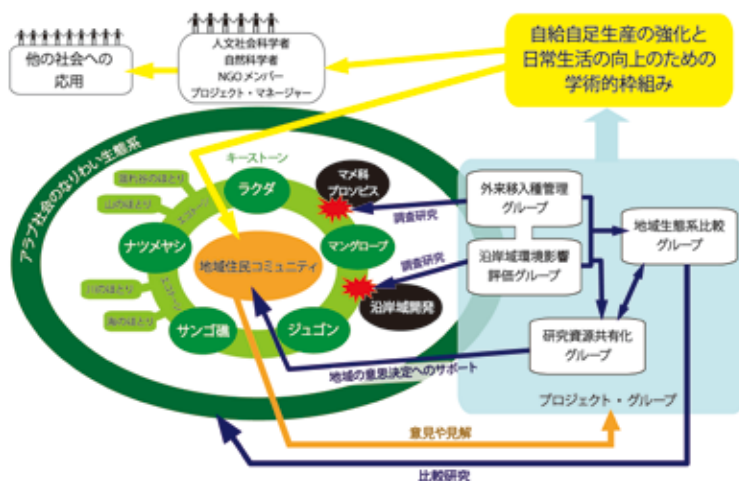
渡邊●なるほど。全体のつながりを見ることが大事なんですね。

縄田●必ずしも多様な資源に恵まれているとはいえない中東乾燥地域の自然環境下での人の暮らしぶりや社会、人間関係のつくり方、問題意識のとらえ方は、周辺の自然環境と密接に関わっているし、個別の村々や大都市の間にも密なつながりがあります。この全体像を描きだせれば、いま起こっている問題の本質も見えてくる。それが、このプロジェクトの研究意義の一つです。

◎過去の開発政策の過ちになにを学ぶか

渡邊●「外来移入種マメ科プロソピス統合的管理法の提示」というテーマも目をひきます。このきっかけは……。

縄田●15年くらい前に、紅海沿岸のスーダンの村に1年以上住み込んでいたとき



プロジェクトの方法論、組織、研究計画



「ポスト石油時代」にアラブ社会の人びとはどう生活してゆくのだろうか(サウディ・アラビア、リヤド 撮影：縄田浩志)

に、ある村人から相談を受けたことがきっかけです。「10年ほど前に植林された樹のせいで井戸の水位が下がって飲み水もままならないし、根が張って引き抜くこともできない。なんとかしてくれないか」。それがプロソピスでした。

渡邊●そもそも中南米原産のプロソピスがどうして持ち込まれたのですか。

縄田●1980年代まではFAO(Food and Agriculture Organization:国際連合食糧農業機関)が沙漠化への対処と農業開発の両方に良いとして、アフリカと中東で植林を推進していました。しかし、その結果、地下水位が下がったり、豆のさやを食べた家畜が死んだりしました。2000年には、「世界の侵略的外来種ワースト100」に入れられるくらい問題になっています。

渡邊●悪い影響ばかりのような気が……。

縄田●もちろん、当時の科学者も行政機関も嫌がらせをしようとしたわけではありません。プロソピスは窒素を固定するし、沙漠化も防止する。成長も早く、薪炭や燃料として地元の人に利益があるはずだと導入したわけです。良い側面もあったが、弊害もあったということです。

渡邊●乾燥地研究には沙漠緑化や耐乾性作物導入に関するものが多いですね。プロソピス植林もその事例の一つですか。

縄田●研究者も行政に従事する人も、一般の人も含めて、自分の過ちを認めることは難しい。それでも、間違いは間違いとして現地の人たちと協力して代替案を科学的に提出することが重要でしょうね。

渡邊●とても興味深いテーマですね。それを「地球環境問題」にどう位置づけられるの

でしょうか。

縄田●現在、世界的に行なわれている技術移転や植林も含めて、開発政策がもたらすマイナスの側面をどう修復するか、という課題につながると思います。これまでの開発や技術

移転は、科学者が開発したもの、政治的、行政的に決めたものをトップダウンで村レベルにまで浸透させてきました。そうして成功した場合もあるが、弊害をもたらしたケースも多い。

プロソピスの弊害は確かに地域の問題ですが、根本にある課題はかなり共通しているように思いますね。

◎ボトムアップのアプローチを基本に

渡邊●課題解決には、なにが必要ですか。

縄田●地に足をつけて長く暮らしてきた人びとの知識や知恵を科学者や行政が汲み上げて、人間と自然との関わりあいや農業生産にいかす。つまり、ボトムアップ的なアプローチが重要だと思います。

渡邊●地球研のプロジェクトに参加されているNGOの方がたには、その点を期待しているのですか。

縄田●地球研の良いところは、NGOや企業の方とも共同研究ができることです。現場経験が豊富な方も多く、時には研究者よりも的確に状況を把握しています。

渡邊●その経験は、どういきていますか。

縄田●たとえば、マングローブの植林です。マメ科プロソピスの植林では弊害の側面を強調しましたが、海水淡水化プラント建設などの開発のフロンティアとなっている中東地域の沿岸の自然環境をどう守り、維持するかを考えたとき、マングローブの植林は地域生態系の保全に重要な役割をはたします。ですから、1970年代から植林に携わってこられた方がたが試行錯誤をとしてお得られた知識、その過程

わたなべ・みつこ

専門は自然地理学。研究プロジェクト「民族／国家の交錯と生態変化を軸とした環境史の解明」中央ユーラシア半乾燥域の変遷」プロジェクト研究員。二〇〇六年から現職。



なわた・ひろし

専門は文化人類学、社会生態学。研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究」ポスト石油時代に向けて「プロジェクトリーダー。二〇〇八年から現職。



での深い観察や洞察力、経験はやはり貴重です。

渡邊●NGO活動と研究プロジェクトとの違いはどのあたりにあるのでしょうか。

縄田●NGOは実践活動が目的ですから、現場での経験や知識がありながらも、科学的知見としての蓄積は充分とはいえない。ですから、このプロジェクトでは、研究に協力してもらいながら、その経験と知識を科学的知見としてレベルのより高いものにしようと考えています。そのうえで、現地の人たちにとって現実味のある方向を提示したい。

◎文系的データを統合する

渡邊●NGOだけでなく、文化人類学者を中心とするメンバー構成で、現地の人たちの知恵や経験を吸い上げることを重視されていますね。この点もプロジェクトの特徴の一つですね。

縄田●私たちは理系的な定性・定量的データに基づく研究成果を重んじています。しかし、そういうデータだけでなく、これまでどちらかというとエピソード的・文脈的に「へえー」で終わっていた文系的なデータを統合したい。そういう新たな社会像を織りなす蚕糸の一本一本を紡ぐことができればいいなと思っています。

渡邊●この「プロジェクトの素」は、現地の人たちの知恵、さらには実践者の洞察力と縄田さん自身の「気づき」に負う部分が大きいですね。これからの4年半、どんな新しい視点、アイデアが出てくるのか、期待しています。

縄田●独りよがりで終わるのでは、まったくダメですね。現地のフィールドワークで実証的なデータを集めてくることがいちばん大事だと考えています。

プロジェクトが終わったとき、そこから見えてくるものは、新しいアラブ世界であり、中東地域であり、なりわい生態系であり、人間社会がめざすべき社会の一つの姿かなと思っています。

2009年8月7日 地球研「プロジェクト研究室」にて

フォーラムの検証

第8回地球研フォーラム「よく生きるための環境——エコヘルスをデザインする」

生態のヘルスと人間のヘルスが交感する軸を模索する

話し手●門司和彦(地球研教授)×山村則男(地球研教授)×梅津千恵子(地球研准教授)×市川智生(地球研プロジェクト研究員)

地球環境問題は、究極的には私たち人間の生存の問題であり、健康はその重要な構成要素。7月に行なった第8回地球研フォーラムでは、まだあまり耳慣れない「エコヘルス」というキーワードを表題に掲げた。人びとの健康は、環境が維持されなければ保つことができないことを、自然、環境、社会の面から伝えることを狙いとした。健康と環境との関わりをどのように明らかにできたか、さらに、未来に向けて「よく生きるための環境」とはなにかについて、地球研の参加者とともに検証を行なった。

門司●地球研では、川端善一朗さん*1、奥宮清人さん*2、そして私のプロジェクトが病気を扱っているとして、よく一括りにされています。しかし、健康は人びとの生存そのものに関係します。地球研のすべてのプロジェクトが強く意識すべき問題だと理解しています。

その意味で、現代社会の問題に取り組んでいる山村さんや梅津さんと問題意識の共通性を論じたかったのです。将来的には、過去のことをやっている方がたとも、人間の生存が環境といかにつながっているのかを議論したいですね。人間の健康の問題を最終的には、地球研がめざす「環境と人間のあり方」につながることができればと思います。

環境のなかで人が
生きることが「ヘルス」

山村●私たちのプロジェクトは、健康の問題を直接扱っているわけではないのですが、人びとが自然環境とどう付きあっているか、そうすることで環境がどう変化しているかを考えています。

●趣旨説明

「エコヘルス——環境と健康は繋がっている」 門司和彦(地球研教授)

●話題提供

「日本人のエコヘルス——インドネシアとの比較から」

鈴木庄亮(群馬大学名誉教授、NPO 法人国際エコヘルス研究会代表)

「モンゴル草原とボルネオ熱帯林に暮らす人々のエコヘルス」 山村則男(地球研教授)

「サブサハラ・アフリカに暮らす人々のエコヘルス」 梅津千恵子(地球研准教授)

「太平洋の島々に暮らす人々のエコヘルス——蚊媒介疾病対策を通して見えてきたもの」

一盛和世(世界保健機関(WHO)「無視されている熱帯病」対策部門・媒介昆虫生態・対策分野・科学官)

●パネルディスカッション

司会: 阿部健一、門司和彦 パネリスト: 鈴木庄亮、山村則男、梅津千恵子、一盛和世

●開催概要

2009年7月5日(日) 13:30~17:00 (国立京都国際会館)

参加者: のべ約200人

門司●これまで生態学は、人間の活動を環境にとっての攪乱要因として無視してきたところがあります。そうではなく、環境に人間を含めている点で、本来の Human Ecology の原点に立ち戻っているといえますね。今後の発展性をどのようにお考えですか？

山村●生態学ではこれまで、人間をまったく想定しないで生態系が自立的に成り立っているかのように考えてきました。しかし、最近では人間の存在を入り口にすえて研究をはじめることが当たり前になりました。生物多様性にしても、保全の問題で人間の暮らしと関連させることが必要です。門司さんがおっしゃるように、人間というのは、環境にとってはある種のパラメータなのです。

門司●梅津さんは社会環境が人間に対して与える影響を直接の検討対象にされていますね。今回、「エコヘルス」というテーマが与えられていかがでしたか。

梅津●もちろん私たちのプロジェクトでは、間接的にはありますが、食料問題などとの関わりから、健康について常に意識しています。その意味では、それほ

どの違和感はなかったですね。

門司●ヘルスというと、どうもみなさんすぐに医学的な研究と同義に思われるのですが、実際には、もっと広い概念だと思うのです。山村さんや梅津さんが扱っていることは、人間のサバイバルという点

で、ヘルスそのものではないでしょうか。

梅津●私は経済学の出身ですが、フィールドで伝統医などにインタビューすると、得るものが多いですね。ヘルスの問題を狭義に捉えていたなら、まったく関心が向かなかったと思います。

エコヘルスから見える
地球環境問題

門司●梅津さんが扱っているレジリアンスを評価する方法として、エコヘルスは意味があるでしょうし、精神的な豊かさをどのように考えるかも必要でしょうね。今回、狩猟採集民や遊牧民など、いろいろな生業^{なりわい}の人たちの健康状態を比較できたことは、私としてはおもしろかった。これを、会場に来られた方がたの興味・関心に結びつけることができたかどうかは、難しいところですが。

市川●会場に来ていた方がたの多くは、自分の生活をどう変えればよいのか、そのためのヒントを求めているように感じましたね。アンケートでも、先進国や国内の身近な課題を例にとったわかりやすい問題に話題が求められていたようです。門司●意識の高い方がたが参加されていたと思います。その意味では、あえて遠まわりでも、「エコヘルス」の観点から多様な問題をみてもらうことが重要だと判断しました。

一盛知世さんにはオセアニアにおける世界保健機関の活動を紹介していただきました。日本が多くの拠出金を出して活



パネルディスカッションの様子

※1 C-06 病原生物と人間の相互作用環

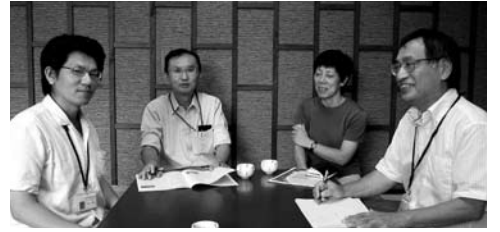
※2 D-03 人の生老病死と高所環境——「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応

専門は日本近代史・医学史。研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」元プロジェクト研究員。二〇〇九年九月から上海交通大学専任講師。

専門は環境資源経済学。研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」元プロジェクトリーダー。二〇〇二年から現職。

専門は数理生態学。研究プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」元プロジェクトリーダー。二〇〇七年から現職。

専門は数理生態学。研究プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」元プロジェクトリーダー。二〇〇七年から現職。



動を支援していることがわかっていただけたと思います。鈴木庄亮さんには、インドネシアの昔の農村社会と比較しながら、今日の日本で、社会環境・家族構成が変化したことによって中年男性の自殺が増加したことなどを紹介していただきました。

全体として、地球上のさまざまな地域にさまざまな人びとが生活していて、それぞれに異なった健康問題と直面していることをわかっていただき、そのなかで自分の問題も相対化してもらえたらと考えました。総合討論はそういう方向に進めたつもりですが、個々の事例を総合して自分たちの問題へとつなげて考えることを伝えるには不十分なところも残りました。本として出版するときの課題ですね。

一方で、市民向けのフォーラムの機会を利用して、エコヘルス研究を進めるうえでの専門的な統一目標や指標を求めたかったのですが、これも課題として残りました。梅津●それには、まず生態のヘルスと人間のヘルスが、密接に連動していることを強調しておく必要がありますね。このことは、自然環境に強く依存して生きているアフリカの人びとの暮らしをみると、とくにそう思います。

21世紀に「よく生きる」ためにできること

門司●われわれ人間は「自然環境に包まれて生きている」という認識が重要です。近代医療の指標でみれば、平均寿命は延びるのだから、自然環境が悪くても生活環境が良ければかまわないという見方も可能です。しかし、長期的にはさすがにそれはまずいでしょう。21世紀の人びとの健康はなにを軸にみていけばよいのか。もはや、個々の地域におけるエコヘルスが独立して存在するわけではないですね。基本的にはみんなつながっている。この点については生態学の分野からなにかヒントはありますか。

山村●現代の深刻な環境問題の多くは、

地域経済からグローバル経済への移行によって生じています。本来地域住民はその自然環境から、衣食住の生活に関する資源を適当なバランスで利用していました。しかし、グローバル経済が進みますと、世界基準で価値のある資源のみを効率的に収奪するようになります。

モンゴルでは、カシミアの値段が高騰して、遊牧民はヤギの飼育・放牧を一挙に増やし、草原は劣化しています。サラワクでは、バイオ燃料用を含む油ヤシの需要が国際的に増すにつれて、熱帯林や二次林が急速に減少し、動物種も極端に減り、土壌の劣化が心配されています。

グローバル化の波は、流通システムの変化によって人間の生活を直接的に変化させるだけではなく、生活の基盤となる自然環境の劣化を引き起こしています。われわれのこのような自然との付き合い方が問われています。

門司●山村さんは、国連のミレニアム生態系サービスの研究は、世界全体で共通した方法で調べたことに意義があるとおっしゃいました。人間が受けた影響についても、同じような発想ができないものなのでしょうか。

山村●国連ミレニアムエコシステム評価では、生態系サービスの変化を世界規模で調べるために、土地利用の変化や資源の過剰利用や汚染の程度を指標化して世界地図上に表現しています。しかし、そのような変化に対して個人や社会が実際どのような影響を受けたのかは十分に評

価されていないように思います。生態系サービスの一部である生物多様性も、生物種の減少の実態や保全の必要性などを指標化して評価するに留まっています。

名古屋で来年開かれる生物多様性条約第10回締約国会議では、さらに踏み込むために、生態系サービスの利用をいかに分配すべきか、その将来像が検討されるはずで。このためには、利用・分配に関して共通の指標が必要となるでしょう。門司●それは山村さんが担当される来年の地球研フォーラムで話してもらえのでしょうか。今回のエコヘルスで取り上げた人間と環境の問題とつながるようだとうれしかぎりですね。エコシステムサービスを経済学の側面からみると、どのような可能性がありますか？

梅津●社会的に、分配については難しい問題をはらんでいます。国家間、地域間、コミュニティ間、最小単位は家庭と個人です。どのレベルでどのような分配をすればよいのか。これは経済学的重要なテーマの一つでもあります。

門司●小さなコミュニティレベルから積み上げることが大事です。身近な問題が地球環境問題につながることを議論することにもなるわけですし。そのためにも、互いのフィールドについての理解を深め、それぞれの立場からの意見の交換が必要なのかもしれません。プロジェクト間の相互乗り入れを想定した、第2ステージがあるとよいですね。

2009年8月11日 地球研「地球研ハウス」にて

第8回地球研フォーラム アンケート結果から（抄）

1. 「よく生きるための環境」というテーマについてどう思いますか？

- エコもヘルスも普段から興味があったが、個別のものとして考えていた。そのつながりを考えるのは、とてもおもしろいテーマだと思った。
- もっと身近でわかりやすいテーマに。
- テーマと実際の話とのマッチングが少ないように思った。実際の調査結果等の報告はあったが、そのようにすべきか？ なにをめざすべきかの話題が少なかったように感じる。

2. 今回の地球研フォーラムで、『地球環境問題』に対する認識は変わりましたか？

- 日本では、電気の節約やエコなど、そういう視

野でしか意識していなかったかもしれない。●マスコミが取り上げているエコに関する問題（話題）とは、かなり異なるという認識をもった。●グローバルな視点で認識したいと思っているが、グローバルだけではどうしようも……ということになるかもしれない。Think globally, act locally なのかなと思った。

3. 今回の地球研フォーラムで、もっとも印象に残った話題はなんですか？

- 農村と都市、インドネシアなどと日本、健康面と精神面で、それぞれに問題点とよさがあり、どちらがよいとは一概に言えないと思った。
- フィラリア等感染症についての環境と健康との関わりや、貧困、生活水準との関わり。

百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



海面上昇で沈みゆく島々 ツバルから日本への警鐘

中田聡史 プロジェクト研究員

なかた・さとし

専門は海洋物理学。環境省地球環境研究総合推進費「環礁上に成立する小島嶼国の地形変化と水資源変化に対する適応策に関する研究」プロジェクト研究員。2009年から現職。

「地球温暖化による海面上昇で沈んでしまう島々があるかもしれない。」そんなマスコミの報道が世間を賑わしてから、かれこれ数年たった。地球温暖化の惨禍を象徴するニュースの一つだったと思う。✓



2009年3月、フォンガファール島にて。大潮時期に床上浸した家屋。満潮時には海水が地面から滲み出して島内を浸してしまう

環礁の国ツバル

2008年秋、地球研は「水」をテーマにそんな島々を調査対象にしたプロジェクトを、国立環境研究所と環境省との協力のもとで立ちあげた。地球研の理念と研究環境に魅せられて赴任した私は、海面上昇の話題でもっともホットな島嶼域である南太平洋のエリス諸島にあるツバルへすぐさま向かった。

ツバルは九つの環礁からなる美しい珊瑚の島国だ。水没してしまうとは到底思えない。

地下20mは塩水ばかり

しかし、ツバルではすでに海水が地中から噴出し、島は海水に覆われ始めている。私と調査チームはフィジーの首都スバからプロペラ機に乗り、ツバルの首都があるフナフチ環礁のフォンガファール島に着陸。水資源評価のための調査を直ちに開始した。

ここ10年の調査技術の発達はずさまじい。比抵抗映像法という電気探査により地下水の鉛直構造を知ることができる。機材はそれほど大掛かりなものではない。アタッシュケース一つぶんの機材とケーブル、ノート PC のような小型計算機があれば、地中に流す電流の電気抵抗値から地質や地下水の鉛直分布を知ることができる。

このデータをみて愕然とした。既往の報告書にも記述されていたが、地下20mくらいまでがほとんど塩水化していた。ツバルの環礁のように透水性の岩石からできている島の地下では、海水と淡水の比重差から、地下水(淡水)が海水(塩水)の上にレンズ状の形で浮いていることが多い。この淡水レンズと言われる地下水がほとんどなかったのだ。わずかに幅数十m、深さ数mの舌状の水溜りのような淡水が、島にちょこんとのっているだけであった。その水溜りでさえ、現地住民にとってはタロイモ畑の貴重な水源である。

では、飲料水はどうするのか。住居に目をやると、水タンクがみえる。タンク直径は大人が両手を伸ばした程度でかな



調査には現地住民とオーストラリアの水タンク会社職員の協力が不可欠だった

り大きい。飲料水を確保するために、このタンクに雨水を集め、貯留しているのだ。それでも、乾季になると深刻な水不足になる。

国立環境研究所の地球シミュレータの予測結果によると、南太平洋では地球温暖化とともに降水量が年々減少してゆくという。

ツバルはミニ日本

今回のフィールド調査をとおり、「海面上昇で本当に島が沈むのだろうか」という当初抱いていた疑問は、「島が沈む前に住めなくなるのではないだろうか」という現実的な問題に変化していた。その根本となるのが「水」の問題だ。

降水量が減少し海面上昇で島内の地下環境が塩水化することで、淡水資源が減少することはもちろん、島の植生にも悪影響が出て、植物が枯死するかもしれない。そう考えると、島嶼域ではまずなによりも水の確保が優先されるのが当然だ。

私たちが調査をしていると、住民たちが「俺たちの水はどうなっている?」と話しかけてくる。やはり彼らの「水」に対する意識は高い。思わず同じ島国である日本と比較してしまう。

海面上昇で日本の平均海面も上昇するが、そのときに土壌の塩水化はどれだけ進行するのだろうか? それは日本の水資源にどれだけ損害を与えるのだろうか? 「水」の問題意識をもっている人はどれだけいるのだろうか? ツバルはまるでミニ日本のように思えてくる。



電気探査時の風景。重さ35kgの電気ケーブルを海から陸へと地面に這わせ設置する

歴史的地域特性 をさぐる

インド北西部の農村から

上杉彰紀プロジェクト研究員

うえすぎ・あきのり

専門は考古学。研究プロジェクト「環境変化とインダス文明」プロジェクト研究員。2007年から現職。

私が所属するインダス・プロジェクトでは過去3年間、インド北西部のハリヤーナー州で遺跡の発掘調査を実施してきた。調査に関連して計10か月ほどこの地域で暮らしたが、遺跡の調査をとおして人びとの暮らしに触れるなかで、この地域の歴史的特性を実感することができた。

東と西の文化が融合する

この地域は、西の乾燥地帯と東の湿潤地帯とをつなぐ役割を古来から果たしてきた。現在もその名残を随所にみることができる。中世以降にヒンドゥー文化とイスラーム文化とが融合してきたようすは、現在の農村の人びとの生活文化にもうかがえる。ハリヤーナー州地域は東西の接点であると同時に、文化交流の地域ともなっていることは興味深い。

ハリヤーナーは、乾燥の度合いが高く、コムギ食が卓越する。村の景観も東の小規模型散村ではなく、大規模型集村である。こうした気候環境に結びついた生活文化は、西のパキスタンと通じるものがある。ハリヤーナー州の農村地帯を歩いていると、なんとなく西方の匂いがするのはこうした文化的環境に由来するのだろう。



ファルマナー遺跡にて、遺跡の発掘調査に従事する筆者

ハリヤーナーの農家。建築意匠にイスラーム建築の影響がみられる



東西の文化を結びつけるルートの一つにガッガル川がある。この川はヒマラヤ山脈前縁地帯に発し、インドのパンジャブ州、ハリヤーナー州、ラージャスターン州、さらにはパキスタンのシンド州へと流下する。この川に沿って多くの遺跡が分布することから、インダス文明の時代にも地域間を結びつけるルートになっていたと考えられる。

古代や中世の時代にも、このルートが現在のパキスタンとインド北西部とをつないでいた。ガッガル川沿いにさまざまな時代の文化遺産が重層的に残されているのもうなずける。

東西交流から生まれる文化的景観

こうした東西交流のきっかけの一つに、インドとパキスタンの分離独立も挙げることができる。分離独立時に、パキスタン領内にいたヒンドゥー教徒はインドに、インド領内にいたイスラーム教徒はパキスタンへと移住することになった。ハリヤーナー州域にも多くの人びとがパキスタン方面から移住してきた。しかし、彼らは移住先の地に完全に同化したのではなく、本来の文化的・社会的アイデンティティを保持しつつ暮らしている。

私自身、ハリヤーナーの農村地帯を歩

いているとき、パキスタンのシンド地方からの移住者に会ったことがある。同行したインドの学生は、移住者は言葉の訛りからわかるのだという。もともとこの地域に暮らしていた人びとと、移住してきた人びととは、交流と反発を繰り返しながら地域の社会・文化的景観を創りつつあるのが現状だ。

フィールドでは、発掘調査で過去の人びとの暮らしぶりを理解しただけでなく、現在この地域に暮らす人びとの生活を目にし、話に耳をかたむけることで、地域社会の歴史性や伝統的な社会の仕組みを理解するきっかけを得ることができる。

ある地域の社会を多様な角度から観察することは、その地域の歴史的・地域特性を理解することにつながる。インド北西部のフィールドでこのことを実感した。



地球環境問題は「存在」するのか？ ——空間・差異・地域、環境と文化・スケール・境界

第3回 地球研コロキウム
2009年7月14日(火)〈地球研講演室〉

発表者●阿部健一(地球研教授)

編集●渡邊紹裕

■発表の趣旨

地球環境問題は、当然のことのように、国家や地域の境界を超えた地球規模の問題とされている。解決にあたっては、地域性を考慮するよりは、グローバルな視点と国際的な協働態勢が強調されがちである。

今回のコロキウムでは、「地球環境問題は地球規模の課題である」との前提を問うてみた。問題の根源は、それぞれの地域に固有な歴史過程と、もっとも広い意味での文化にある、と考えたのである。「地球規模の問題」とすることは、じつは責任の不当で巧妙な分散にすぎない。環境問題の本質は、その原因と責任がそれぞれの地域に求められるべき「地域の問題」ではないだろうか。

むろん「地域の問題」としての環境問題にも、地球規模の視点は欠かせない。いまや「外世界」と無関係な地域はありえないからだ。世界のどの地域もグローバルな、とりわけ経済的な動きに強く影響を受けている。環境問題が地球環境問題となるのは、この点に焦点をあてるときにのみである。一つの地球環境問題は存在しない。それぞれの地域にそれぞれの「地球」環境問題が存在する。地球環境学の構築において重要なのは、具体的な地域における、具体的な問題に関する、具体的な事実を集めることではないか。

以上のことを立証する例として、スマトラの泥炭湿地林地域をとりあげた。農業への転換も困難な瘠瘠の地にもかかわらず、

人びとが1960年代から移住してくるようになった。水路を掘り、過剰な水を排水し、商品作物であるココヤシやアブラヤシを植える。その移住の形態は、近年大きく変わった。当初は貧しい人びとが自発的に家族単位で移入していたが、今日では政府の後押しのもとに、企業が計画的に大規模移入するようになった。その結果、かつての広大な泥炭湿地林は加速度的に消失し、石油代替として注目される油糧作物のプランテーションへと転換された。

森林とともに泥炭も消失する「環境破壊」の惨状と、いまなお貧しい移住者の生活。現代がかかえる問題の一つの縮図である泥炭湿地林のなかで、地域とはなにか、開発とはなにか、環境問題とはなにかを考えてみた。

ディスカッション

渡邊●阿部さんが、地域と環境の問題に対して、地域研究はどのようにアプローチすべきかを、ご自身の研究理念とこれまでのフィールド研究を具体的に紹介しながら熱く語った。自らのスタンスを前面に出し、地域研究や地球環境問題における「《私》性」の問題を考えざるを得ないといった問題提起につながるものだった。家田さんのコメントもその問題に関わったがゆえに、問題の認識やアプローチの「片寄り」と「個別性」を指摘されたのだと思う。

地域研究のメディエーター

阿部●私個人の考えのみを示したわけではない。「泥炭湿地林」に移住した人びとに地域への愛着はなく、儲けるだけ儲けて、できるだけ早く出てゆきたいと考えている。彼らも私自身も、いつまでたっても「よそ者」という意味では同じである。

家田●「泥炭湿地林」は均質な地域社会であるように聞こえてしまう。儲けて出てゆきたい人と、そうでない人との差があるのではないか。

研究者が地域の「代弁者」となることは地域研究のとりべきスタンスではなく、あの人たちは私と同じと言ってしまったら、議論は進まないのではないか。

阿部●「代弁」しているのではない。「共感」するところがあり、それを拠り所にすることで泥炭湿地林とその外の世界をつなぐ「メディエーター(媒介者)」の役割が果たせるのではないかと考えている。それが地域の未来可能性につながるとも考えている。

縄田●地域の環境問題における「《私》性」の意味の議論は興味深い。《私》性を排除しながら「メディエーター」として地域研究や地球環境問題に関わる可能性や具体的な道筋がどうあるのかを考えてみたい。《私》を前面に出さないことがはたして可能だろうか。

阿部●できないと思う。しかも、そのことを自ら認めたくて関わるのと、意識せずに関わるのとでは大きく違う。

渡邊●家田さんからは、泥炭湿地林の生態景観の変化をどう位置づけるのかの疑問も出されていましたが……。

阿部●どのような立場で景観を見るのかによって異なってくるだろう。ココヤシ林に代わった湿地林は移住者には豊か

な景観だし、「環境主義者」とにとっては惨憺たる景観。メディエーターとしての私の立つ位置はその間にあるが、正直に言えばいまだ視点が定まらずにいる。

「地域」のくくり方と「域外」との関わり

渡邊●今回のキーワードの一つは「地域」。「地域とはなにか」の議論は、ずっと続いているが、やはりなにを問題とするのか、問題をどのように解決しようとするのかで、認識や空間的な範囲はさまざまに設定されることになろう。したがって、「地域」の構造は重層的であり、時間的にも空間的にも変化するだろう。しかし、ある局面では空間的な認識や限定を明確にしないと議論できなくなる。それが「くくり方」の問題であろう。

阿部●なにを課題にするかで「地域」は決まってくる。拠って立つディシプリンによっても「地域」は変わってくる。

秋道●今回の阿部さんの話は、スマトラの「泥炭湿地林」にズームインした内容であった。そこは海賊がいたりするなど、他の人びと関わる場所でもある。これらの存在や関わりがあって「地域」が成り立つ側面を外して考えてはいけな

※ Nakba パレスチナの人がパレスチナ問題に言及するときを使う言葉で、「自分の力ではどうしようもない大惨事」のことである。人と自然の共存などという言い草が空虚に思える泥炭湿地林の現状を前に、ついでこの言葉が頭をよぎった。(阿部)



スマトラの開拓移住村。1か月の滞在調査が終わってポートで村を出てゆくときに見送りに来てくれた(撮影:阿部健一)

渡邊●地域としてくくったときに、くくることで外れてしまう、あるいは漏れてしまうコトやモノがあることを意識しないといけません。地域外との関わりにも、とくに地球環境学の立場からは、大きな関心をもたないといけません。

湯本●「環境難民」ととらえると「悪者」や加害者を隠蔽してしまうことがあるように、「地球環境問題」として認識すると、政策の対立が地域的な対抗関係を隠してしまうことがある。今回話題となったスマトラの泥炭湿地林の問題においても、インドネシア政府の政策とのかねあいが見えにくかったように思う。くくり方や視点には大きな意義がある。

木下●地球環境研究としての地域研究であるならば、やはり地域レベルの要素や要因との関わりが深い「地域の環境問題」と、地球規模の現象との関わりが深い「地球環境問題」との違いを地域レベルで描き出さないといけません。

家田●こうした地球環境研究としての地域研究を進めようとするならば、より広域の「地域」を設定することも必要で、有益な方向になると考える。

阿部●いずれも指摘されたとおりだと思う。「地域」は研究対象を認識するくくりであり、実際に問題が起こっている場合もある。この点は強調してよい。そして

■参加者のコメント

環境研究における地域の「くくり方」と地域の発想

家田 修(地球研客員教授)

強調された「地域研究はディシプリンの寄せ集めではない」との指摘は、共有できるだいじな点である。

今回の発表では、地域研究から環境問題にアプローチする意義と方法は示されたものの、さまざまな対象やスタイルの地域研究の位置づけはよくわからなかった。というのも、概念的で大枠の問題認識からスタートしたが、「自分の研究フィールド」の事例のまとめで話が終わり、特定フィールドの議論の意味や展開がきちんと示されなかったからではないか。

議論は、対象地域を生態学に基づいて「泥炭湿地林」としてくくったうえでの展開だったが、別のくくり方もあるのではないか。他の視点や切り口との関係についての指摘もほしいところだ。さらに言えば、対象地域の生態景観は昔と今、そして未来は異なるはずで、そういう時間軸でとらえることも重要であろう。

問題の解決に向けて、スケールを目的と方法によって変えながら、自在に地域をくくり直す作業は不可欠だろう。

「結論」へのプロセス

渡邊●今回の報告とその後の討論は、大きくまとめると「個別性」、「偶然性」から「普遍性」への道筋に関する問題提起であった。個々の地域における研究活動から、地球環境研究としてのまとめのプロセスの問題である。

縄田●阿部さんが発表のまとめで示した「ナクバ*:陰々滅々研究」の提案には全面的に共感する。そのうえで、この姿勢は地球研で第Ⅱ期にめざす「設計科学」と両立するのかどうか。たしかに、未来についてはかなり開かれた姿勢をもつものであろうが、提言につながる「スペキュレーション」を提起できるのであろうか。

阿部●すぐわかった気にならないように、

地域と越境、「ねじれ」から見えてくるもの

窪田順平(地球研准教授)

まず「越境」をテーマにした2008年の地球研フォーラムで示した「地球と地域の関係」を改めて整理すると、1)「地球全体→地域」(地球温暖化問題など)、2)「地域→地球全体」(鳥インフルエンザなど)、3)「地域から地域」(地球全体で起こる地域の環境問題など)となる。この視座からは、物理的な現象のスケールだけで地球や地域をとらえることはできないし、環境問題をローカルのスケールでは解決できないことが明らかとなる。地球研の自然科学者の多くは、物理的な現象のスケールに引きずられて、個別問題への認識や取り組みが分散・孤立しているように見える。この反省を「設計科学」を目指す第Ⅱ期でどう活かすかが重要である。

「境界」は「地域」の裏返し表現でもある。自然的境界と人間社会が設けた境界との「ねじれ」が、「地域」の環境問題を生み、解決の制約にもなっている。いわゆるアラル海問題でも、旧ソ連時代よりも連邦崩壊以後に問題は深刻化している。この「ねじれ」から地域と環境の問題が見えてくる。

大きな問題を前に安直に結論を出すのではなく、現場に通い続け、関与し続け、記録し続け、考え続けたいと考えている。立本●「地域研究」と「環境問題」にはたしかに類似性がある。阿部さんが紹介したC.マクドナルド(フィリピン地域研究者)や川喜田二郎がいう「地域」へのアプローチは、「環境」を対象にしても成り立つだろう。

では、「環境決定論」から決定的に離れたところにある「環境設計科学」をどのように構築できるか。「地域」では時空間のフレームが比較的はっきりしているが、「環境」では少し異なる。環境問題を扱うときに肝要なのは、その差を意識しながら、「結論の過程を重視すること」「現場で記録し考え続けること」、つまりスペキュレーションを重ねることではないだろうか。

(議事作成●縄田浩志)

討論を終えて 阿部健一

あれもこれも詰め込みすぎたうえに、バトスが先走ったきらいはある。

討論が「私」性を巡っているのは、自分自身の「立ち位置」の重要性を認めながら、いまだ定まっていないところを突か

れたのかもしれない。20年以上この地域での研究を続けながら、いまだ解決策を見いだせないが、地球研という潜在力を秘めた場の力を借りて、自分なりの「結論」をここで出せれば、と思う。

宿敵がいてこそ、がんばれる

長野宇規 (神戸大学大学院農学研究科・准教授)

競技の世界では、宿敵がいると競争心から良い記録が生まれます。研究の世界でも同様だと思います。

地球研で楽しかったのは、同年代にまったく違う分野の人びとがいて、それぞれが地球環境学の構築についておもしろいことを言おうとして張りあっていたことです。初期の地球研では、周囲の人がある分野でどんなに「偉い人」かもよくわかっておらず、おもしろくないことを言うに歳が離れていようと遠慮なしに食ってかかるような雰囲気がありました。



春日小学校時代の研究室風景、狭さのストレスが活発な議論の源だったかもしれない

敗北から始まった地球研の日々

私は、地球研の創設後間もない2001年にポスドクとして着任しました。最初についつい自分の専門分野の用語丸出しで研究を紹介したところ、老師たちに「わからない、つまらない」と四方八方からコテンパンに叩きのめされました。あまりの悔しさに、いつの日かの復讐（論破）を誓い、周囲の人たちの論理構造を注意深く観察し始めたのでした。

人の考え方の本質は、真剣勝負の議論で外に表れます。思わぬ金言に出合えるほか、そのエネルギーに触発されて自分の頭にも新しいアイデアが湧くときが幾度もありました。スポーツでもライバル同士が技を盗みあって互いの技術に磨きをかけるように、地球研でも他の分野の考え方や技術を借りて自分の専門分野に応用することができます。しばらくすると所内の人の流儀に慣れました。それでも時折、フォーラムやシンポジウムで、外部の大物に打ちのめされることがあり、これまた奮起材料になりました。

高度な真剣討論の場として

いま地球研を離れて強く思うのは、このような真剣討論の場の提供こそが、ほかにはない地球研の最大の特徴だということです。大学も研究所も分野ごとの「知の構築」を至上課題としていて、そこでは驚くべき純血が守られていたりします。

地球研の使命の一つは、まったく異なる純血同士に真剣勝負の場を与え

て、地球環境問題の解決に役立つ強力な雑種をつくり出すことです。ただし、真剣勝負をするには、お互いの話が噛みあう必要があり、周りはフェアプレーを促さなければなりません。そうでないとつまらない「いなし合い」に終わり、周りも白けてしまいます。

世界一をめざして常に勝負を

立本成文所長が就任時に、「地球研を世界一の研究所にしたい」と言っておられたことを記憶しております。その近道は、宿敵をつくってどんどん真剣勝負することだと思います。

地球研には必要に応じて世界のどこからでも論客を呼べる自由があります。刺激のあるアリーナを提供しつつ、積極的に対外試合をして、時には敗北しながらも相手のエッセンスを組織に取り込めばよいのではないのでしょうか。そんな生き生きとした「頭」の共同利用機関としてのさらなる発展を願っています。



若手は老師に口で負けても身体感覚で負けてはなりません。論ばかりこねずに田んぼで土もこねます

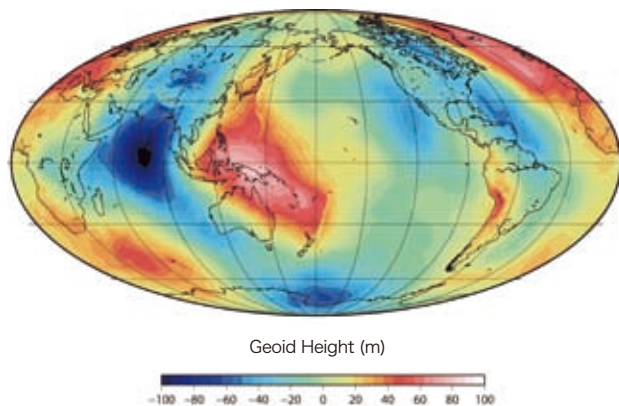
ながの・たかのり

専門は農業土木・環境情報学。資源と制度をキーワードに、気候変動が農業生産に与える影響の評価、環境モニタリングの手法開発など、幅広く農業問題に取り組んでいる。2001年から2008年までCOE研究員、日本学術振興会特別研究員、技術補佐員などとして地球研に在籍。2008年5月から現職。

所員紹介——私の考える地球環境問題と未来

青いだけが地球じゃない

山本圭香 (地球研プロジェクト研究員)



私たちにとってもっとも馴染みのある地球の姿は、おそらくテレビなどで日ごろよく目にする青い地球の衛星写真でしょう。こうした写真画像とは別に、赤外線や磁力、重力の分布などで地球の姿を表すことも可能です。

重力で見る地球の姿

図は、重力で見た地球の姿「ジオイド (Geoid)」です。これは物理的には「重力の等ポテンシャル面」を表わしています。ジオイドは、山の標高や海流の大きさなどを決定する基準面ですが、このジオイドには起伏があります。

ジオイドの高低差は、場所による密度構造の違いを反映します。地下に重いものがある場所のジオイドは、高くなります。重力を測ると、このジオイドの高さがわかり、これによって地球の質量分布の情報を得ることができるのです。

見えない地球の活動をとらえる

地球上の多くの現象、たとえば陸水、海洋、氷床の変動などは、地球の質量の分布を変化させます。そのため、地球の形(ジオイド)も時々刻々と変化します。こ

の変化を調べることによって、これらの現象に伴う質量変化がわかります。

2002年に打ち上げられた GRACE 衛星は、地球の重力の時間変化を全球規模で測定する最初の衛星です。この衛星から得られる質量変化の情報は、地球のグローバルな水循環過程を明らかにすることに貢献しています。私が地球研で行なっているおもな研究は、この GRACE 衛星データを利用して、アジア都市域とその周辺の陸水の経年変化を明らかにすることです。

GRACE 衛星のデータを陸水の研究に利用するメリットの一つは、直接目で見ることのできない地下水を含む陸域総貯留量の変化を、質量変化として検出できることです。反面、質量変化するものはなんでもとらえてしまうため、目的以外のシグナルとの分離が難しいこと、空間分解能が弱いこと、データ処理の手法がまだ十分に確立していないことなどの問題を抱えています。

現状ではまだ発展の余地がある未成熟な技術ですが、そのぶんデータ処理面でも応用面でも、個々の研究者による工夫やアイデアをまだまだ生かすことのできる分野です。

EIGEN-4C重力モデルから計算された地球の(Staticな)ジオイド高

地球の高さの基準面であるジオイドは、平均的な海の高さとほぼ一致しています。標高を表わすとき「海拔何メートル」というのはこのためです。図から、インドネシア周辺の海の高さは高く、インド洋では海の高さが低いことがわかります。これは地球内部の密度の違いを反映しています。インドネシア周辺では、地球はより密度の高い構造をしています

グローバルな視点とローカルな視点とが補いあう

地球研でたびたび議論されるように、地球観測には、GRACEなどの衛星によるグローバル観測と現場観測の二つのアプローチがあります。たとえば、ある現場で干ばつが観測された場合、そこにグローバルな観測データを加えることで、その干ばつが汲み上げなどによるローカルな変化であるのか、地球温暖化などによるもっと大きなスケールの変化であるのか、あるいはそのどちらの寄与が大きいのかなど、現象をより深く、正確に理解することができます。

逆に、GRACE衛星で観測され、原因不明だった変動の要因が、現場観測をしている研究スタッフの指摘によって明らかになった経験も地球研に来て何度もあり、わくわくしました。

地球研での研究をととして、双方の視点から地球を見ることで、さまざまな現象を理解できたらおもしろいと考えています。



いろいろな昆虫に遭遇する地球研の中庭にて。先日は、好きなはずのバッタをうっかり踏んづけてしまいました。ごめんなさい

■リーダーからひとこと

谷口真人 (地球研教授)

双子衛星の正確な距離から重力を評価する衛星GRACEが、地下水貯留量変化などの陸水変動研究の分野で注目されています。山本さんはGRACEデータの解析ができる日本で数少ない若手研究者で、地下環境プロジェクトをはじめ地球研の水関連研究での活躍が期待されます。それにしても、甘い物が体内に貯留しないのはなぜか？ GRACEの原理以上に謎です。

■やまもと・けいこ

■略歴

2007年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了、博士(理学)

2007年4月～2008年3月 京都大学理学研究科講師

2008年4月～現職

■専門分野 測地学

■地球研での所属プロジェクト

「都市の地下環境に残る人間活動の影響」

■研究テーマ

衛星重力データを用いた陸水変動の研究

■趣味 能楽、おいしいケーキめぐり

イベントの報告

第34回 地球研市民セミナー

報告 万物共存の哲学
——環境思想としての朱子学
2009年9月11日(金) 15:00~16:30
(地球研講演室)

地球環境問題が広く認知されながらも、抜本的な解決策が見いだせないなか、モンスーンアジアの自然共生型自然観について、あらためて再評価する動きがあります。こうした動向をふまえつつ、今回のセミナーでは、まず、中国宋代の儒学者・朱熹(朱子)の思想の概要について木下鉄矢教授が報告し、これを受けて鞍田崇上級研究員が聞き手となって、朱熹思想の現代的意義について議論が交わされました。

「朱子学」というと、古典注釈にいそむあまり現実からかけ離れた議論に終始するものとの揶揄を受けることもあります。木下教授のねらいは、朱子学研究がはまり込んできたそうした従来のスタンスから脱却し、朱熹という具体的な一人物の生きた思想、その生命力を再興するところにありました。

このことは、朱子学における倫理性の議論に、きわめて鮮明にあらわれていたように思われます。たとえば、人間と自然を分け隔てることなく、両者の「共存」に重きを置いた考え方をとる場合、とすると、人間の特性や役割があいまいになりがちですが、木下教授が「万物共存の哲学」を語る一方で強調したのは、自然との共存のなかで占める人間の「位置」であり、自らの位置の自覚を通じて人としての「職」=責務を果たすことの意義でした。

なかでも印象的だったのは、人間が自然のなかで独自の役割を担う根拠としてあげられた、「衆理を具えて万事に應ず」という朱熹の言葉でした。教条主義的に「かくあるべし」というのではなく、肝要なのは、その時どきの感性の力だというわけです。今日、環境問題との関連でライフスタイルの転換が求められていますが、そこに感受性の問題が決定的に抜け落ちていることをふまれば、朱熹が見通した自然と人との関わりには、おおいに参照すべき点はまだ数多くあるように思われました。(鞍田 崇)



出版物紹介

地球研所員の翻訳による絵本のシリーズが発売されました

福音館書店「みつげようかがく」シリーズ

アメリカで40年以上にわたって読まれ続けている人気の科学絵本シリーズから選りすぐられた6冊。知ること、考えることの楽しさをつたえる「みつげようかがく」シリーズの翻訳に、地球研の所員が携わりました。



『ほら あめだ!』

フランクリン M. ブランリー 作
ジェームズ グラハム ヘイル 絵
やすなり てっぺい 訳

『くうきは どこに?』

フランクリン M. ブランリー 作
ジョン オブライエン 絵
おおにし たけお りゅうさわ あや 訳

『せかいはい なにで できてるの?』

——こたい、えきたい、きたいのはなし

キャスリン ウェドナー ゴイフェルド 作
ポール マイゼル 絵
ながの たかのり 訳

『たね そだててみよう』

ヘレン J. ジョルダン 作
ロレッタ クルピンスキ 絵
さとう よういちろう 訳

『こんちゅうって なんだ?』

アン ロックウェル 作
スティーブ ジェンキンス 絵
あべ けんいち 訳

『たべることは つながること』

——しょくもつれんさの はなし

パトリシア ローバー 作
ホリー ケラー 絵
ほそや あおい くらた たかし 訳

いずれも定価1,300円+税

研究活動の動向

愛媛県西条市と交流協定を締結

2009年8月3日(月) (愛媛県西条市役所)



総合地球環境学研究所と愛媛県西条市との間で、地球研における地球環境研究の充実と西条市における地域の活性化を目的として、2009年8月3日に交流協定を締結しました。

交流協定調印式は、愛媛県西条市役所で執り行なわれ、西条市からは伊藤宏太郎市長、渡辺高尚副市長、大越康史副市長をはじめ関係者45名、地球研からは立本成文所長、秋道智彌副所長はじめ関係者6名、計51名の出席を得ました。

また、この交流協定を記念して、日高敏隆前所長の著書『生物多様性はなぜ大切な?』他37種74冊の図書を西条市に寄贈しました。本贈書は、西条市図書館に配架され、西条市民らの環境教育の一助となることが期待されます。

新 FS(予備研究)紹介

9月4日(金)のFS移行発表会と研究プロジェクト所内審査委員会を経て、IS(インキュベーション研究)のうち、次の2件がFSに移行することが決定しました。

- 「モンスーンアジア地域における稲作・畜産活動の大気環境負荷の研究～宇宙からの人間活動ウォッチング～」研究代表者：林田佐智子(奈良女子大学理学部教授)
- 「東南アジアにおける食・農リスク適応型の流域圏設計」研究代表者：嘉田良平(横浜国立大学大学院環境情報研究院教授)

招へい外国人研究者の紹介



CHOY Yee Keong
チョイ イー ケオン
●所属プロジェクト
人間活動下の生態系ネットワーク
の崩壊と再生

- 招へい期間 2009年10月1日～2010年3月31日
- 現職 サラワク大学 研究員
- 専門分野 生物多様性環境保全研究

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2009年7月16日～9月15日開催分

開催日	タイトル	主催者 (プロジェクトリーダー/プログラム等)	開催場所
7月17日 7月24日	第2回 全球都市全史研究講演会	村松 伸	東京大学生産技術研究所
7月18日	Workshop on Water Quality Management in Developing Asian Megacities	谷口真人	地球研セミナー室
7月21日	循環プログラム研究会「世界貿易の鼓動は愛」	循環領域プログラム	地球研講演室
7月22日	イリプロ講演会「イリ河流域のオーロト人が所蔵するリオイラト＝モンゴル関連のトド文字史料」	窪田順平	地球研セミナー室
7月22日	第16回 中国環境問題研究会「中国の都市化と環境」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
7月23日	福井希一 IS「全球緑化：思考と実践」シンポジウム	福井希一	地球研セミナー室
7月24日	佐藤雅志 FS「熱帯アジアにおける新興作物の急激な拡大による農業生態系の遺伝子汚染」シンポジウム	佐藤雅志	地球研セミナー室
7月29日	長江 FS 第1 回公開セミナー	田中広樹	地球研セミナー室
8月3日	第28回 レジリانس研究会「コモンプール資源システムの制度分析のための空間構造」	梅津千恵子	地球研セミナー室
8月14日	第23回「人と自然：環境思想セミナー」 「身体環境としての衣服」	佐藤洋一郎	地球研講演室
8月19日	第17回 中国環境問題研究会「環境史からみた中国の環境問題」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
8月26日	NEOMAP 第3 回景観セミナー	内山純蔵	地球研講演室
8月27日	イリプロジェクト談話会／第4回 中国環境問題ワークショップ「デジタル・シルクロードの可能性」	窪田順平	地球研セミナー室
8月28日	レジリانسプロジェクト 第2 回 ルサカワークショップ	梅津千恵子	ザンビア共和国ルサカ
8月28-29日	文明環境史領域プログラム 国際シンポジウム「人類文明の未来に向けて——SF作家と地球研の対話」	文明環境史領域プログラム 協賛：株式会社イオ・小松左京事務所	地球研講演室
8月30-31日	国際植物考古学シンポジウム「稲作の起源とその伝播——植物考古学と遺伝学の視点から」	文明環境史プログラム 佐藤洋一郎	地球研講演室
9月14日	第1 回 ジャカルタ都市研究会「東南アジアの首都を読む——（ジャカルタの誕生）を中心に」	村松 伸	地球研セミナー室

地球研に来られた主な方がた

(2009年度4～9月)

4月 3 日 (金)

中井敏宏 京都府監査委員事務局長
石野茂 京都府文化環境部環境政策監

4月 23 日 (木)

末吉竹二郎 国連環境計画金融イニシアティブ特別顧問

4月 24 日 (金)

小森彰夫 核融合研究所長

6月 15 日 (月)

ABUDURASUL, Idriss 新疆文物考古研究所長

6月 16 日 (火)

浅野孝 カリフォルニア大学デービス校名誉教授

6月 20 日 (土)

磯田文雄 文部科学省 研究振興局長 ほか

6月 30 日 (火)

BROADBENT, Jeffrey Praed
ミネソタ大学社会学部 教授

7月 13 日 (月)

大島 仁 京都市環境政策監

7月 22 日 (水)

飯吉厚夫 中部大学総長
北川源四郎 統計数理研究所長 ほか

8月 14 日 (金)

鷲田清一 大阪大学総長

8月 22 日 (土)

FULLER, Dorian Q ロンドン大学教授 ほか

9月 4 日 (金)

PARK, Mi-Jeong Ministry of Culture, Sports and
Tourism Office for Hub City of Asian Culture, KOREA
LEE, Keun-Young Ministry of Culture, Sports and
Tourism Office for Hub City of Asian Culture, KOREA

9月 30 日 (水)

CHABAY, Ilan Professor of Public Learning
and Understanding of Science Chalmers University
of Technology, SWEDEN

平成21年度 科学研究費補助金一覧

2009年9月7日現在

研究種目	研究代表者	研究課題名
基盤研究 A (一般)	中野 孝教	環境同位体トレーサビリティ法を用いた陸域——淡水域生態系変化の原因解明
	渡邊 紹裕	環境トレーサビリティ手法による農業地域水環境形成メカニズムの分析
基盤研究 A(海外)	奥宮 清人	西ニューギニア地域における神経変性疾患の実態に関する縦断的研究
基盤研究 B (一般)	白岩 孝行	水コア解析に基づく北部北太平洋への陸起源物質降下量復元
	大西 正幸	ババア諸語の比較言語学的研究——南ブーゲンヴィル諸語と東シンプー諸語を対象として
基盤研究 B(海外)	長田 俊樹	南アジア諸言語の類型論的研究——南アジア言語領域論の再検討
	谷井 章子	ボルネオ低地フタバギ林における植物——送粉者ネットワーク構造とその生成要因
基盤研究 C (一般)	石丸 恵利子	縄文時代における生業・交易圏の復元研究——動物遺存体の産地同定を中心として
	小泉 都	ボルネオ島中央部における生態資源に関する民俗知識のネットワーク
挑戦的萌芽研究	縄田 浩志	アラビア語を用いた地域住民との研究資源共有化による社会的意思決定サポート法の構築
	細谷 葵	中国におけるイネの栽培化と農耕社会の形成過程——考古学と遺伝学の学際的研究
若手研究 B	酒井 章子	オオバギ(トウダイグサ科)と花序で繁殖するヒメハナカメシの送粉共生の起源
	中野 孝教	地質の安定同位体を利用した環境実感指標の開発：愛媛県西条市を事例に
若手研究 (スタートアップ)	小坂 康之	ラオスの水田景観における植物多様性保全に関する研究
	奈良間 千之	中央アジア山岳地域における最近の氷河変動と氷河湖決壊に関する現状評価
特別研究員奨励費 (外国人)	本庄 三恵	水域生態系において懸濁物質がウィルス感染に与える影響
	加藤 雄三	中華民国時期の上海・天津における不動産債行——南北両祖界と周辺域の物権と司法
若手研究 (スタートアップ)	市川 智生	近代日本の開港場における感染症と国際社会
	山本 圭香	衛星重力データによる水滞留時間の算出とグローバルな水再配分過程の解明
特別研究員奨励費 (外国人)	森 若葉	シュメール語動詞接頭辞の形態論的研究——前三千年紀後半～二千年紀前半の資料分析
	瀬尾 明弘	繁殖様式の違いが遺伝構造に与える影響を分子植物地理学的に解明する
若手研究 (スタートアップ)	蔡 国喜	東南アジアにおける国境流動人口の感染症伝播疫学研究——セックスワーカーとエイズ
	東城 文柄	ラオスにおける森林破壊の規模と要因
特別研究員奨励費 (外国人)	中村 亮	資源利用と民族共存に関する歴史・自然環境分析を用いたスワヒリ海村社会の比較研究
	松永 光平	ポスト「退耕還林」における水土流失危険度の総合的評価
特別研究員奨励費 (外国人)	HAQ, A.	砂漠化最前線における植生のロジスティック成長モデルの構築と生態環境修復効果の予測

イベント情報

国際シンポジウム

募集 オホーツク海の環境保全に向けた 日中露の取り組みにむけて

2009年11月7日(土)～8日(日)

〈北海道大学学術交流会館 第一会議室〉

オホーツク海および隣接する親潮域は、世界でもまれにみる豊かな海域です。近年、これらの海域に与えるアムール川 (中国名：黒龍江)の影響が明らかになりました。オホーツク海や親潮域の自然環境を保全するためには、隣接するアムール川流域を同時に保全する必要があります。このシンポジウムでは、日中露の三か国の研究者による討論を通じ、この陸域・海域の環境保全に向けた国際協力のあり方を議論します。詳細は、プロジェクトのウェブサイトをご覧ください。
<http://www.chikyu.ac.jp/AMORE/2009symposium.html>

イベント情報

第4回 地球研国際シンポジウム

募集 境界のジレンマ ——新しい流域概念の構築に向けて

2009年10月20日(火)～22日(木)
〈地球研講演室〉

水の流れ、そして水にとけた物質の流れは、細分化された自然科学の個別分野の「境界」を乗り越えて動いており、陸・川・海を統合的に理解する必要性が高まってきています。

水を使う人間もまた、国境などさまざまな「境界」を水の流れの上にもうけてきました。こういった境界は人間文化の多様性をかたちづくるために不可欠ですが、不自然な境界が自然のまとまりを分断するとき、地球環境問題が引き起こされ、また問題への対処を難しくしているとも言えます。

このような問題意識にもとづき、本シンポジウムでは、「水」に引かれてきたさまざまな境界線のうち、とくに二つの境界に注目します。一つは「地表水と地下水の境界」、もう一つは、「陸と海の境界」です。1) 地表環境と地下環境——知られざるつながり、2) 陸と海——境界を越えた連続性、3) 人為的境界が引き起こす問題、4) 境界を超えた新しい流域マネジメント、5) 総合討論、を通して、人為的境界が引き起こす弊害を乗り越える方法、そのための研究課題を議論します。

■20日(火)9:00～18:00

セッション1: 地表環境と地下環境——知られざるつながり

セッション2: 陸と海——境界を越えた連続性

■21日(水)10:00～17:20

セッション3: 人為的境界が引き起こす問題

セッション4: 境界を超えた新しい流域マネジメント

■22日(木)9:00～12:30

セッション5: 総合討論

●申し込み・問い合わせ先

地球研 研究協力課国際交流係

Tel: 075-707-2152 Fax: 075-707-2106

e-mail: kokusai@chikyu.ac.jp

第35回 地球研市民セミナー

募集 中国の環境問題 ——国際的民間協力の役割と可能性

2009年10月16日(金)18:30～20:00
〈ハートピア京都〉

窪田順平・地球研准教授、高見邦雄・認定 NPO 法人 緑の地球ネットワーク事務局長

近年の中国のめざましい経済成長は、環境問題と引き換えに実現したといえるかもしれません。これは隣国である日本にとっても、人ごとではありません。今回は、長年にわたる民間レベルでの植林活動を通して中国の環境問題と向きあってきた高見邦雄さんをお招きし、中国の環境問題の実態や、民間協力の役割と可能性などについてお話いただきます。また、地球研が中国で行なってきたプロジェクトの成果など、地球研・中国環境問題研究拠点の取り組みも紹介します。

●申し込み・問い合わせ先

地球研 総務課企画室

Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106

e-mail: shimin-seminar@chikyu.ac.jp

第6回 地球研地域セミナー

募集 山・ひと・自然 ——厳しい自然を豊かに生きる

2009年11月28日(土)13:00～17:30
〈まつもと市民芸術館 主ホール〉

信州の雄大な山々に囲まれた里の落ち着いた景観は、豊かだけれども厳しい自然のなかで人びとが年月をかけて築き上げた自然と人との関係、人と人とのつながりを感じさせます。そこには地球環境問題を解く手がかりがあります。信州の「里山」や「地域医療」を例として、世界各地の事例と対比しながら真の「豊かさ」とはなにかを考えます。

●申し込み不要・問い合わせ先

地球研 総務課企画室

Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106

e-mail: hyouka@chikyu.ac.jp

信州大学山岳科学総合研究所

Tel: 0263-37-2432

e-mail: suims@shinshu-u.ac.jp

編集後記

時はめぐりて、生まるる実り

誌面を刷新して、1年。「コミュニケーション」と「対話」の姿勢を前面に出そうと、試行錯誤を繰り返しました。じつは毎回、企画の検討や執筆者の人選など、たいへんなのですが、所内・所外の方がたの協力のおかげで、順調に発行することができています。

そのなかで頼りがいのあった木下鉄矢編集委員が、9月30日をもって地球研を去られました。若手研究員や管理部のなかにも、異動された方がいます。「任期制」と「流動性」も地球研の特徴の一つ。さびしい気もしますが、所外に「地球研仲間」が増えたと思えば、逆に心強いかもしれません。去られた方がたの一層のご活躍と、外からの叱咤激励を期待しています。(阿部)

編集委員 ● 阿部健一(編集長) / 湯本貴和 / 木下鉄矢 / 神松幸弘 / 遠藤崇浩 / 鞍田 崇 / 林 憲吾

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊
Humanity & Nature Newsletter No.22
ISSN 1880-8956

発行日 2009年10月1日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL http://www.chikyu.ac.jp



編集 定期刊行物編集室
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されたい方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。